

色彩表現の意味解釈と視覚的变化のイメージスキーマ —「スタジアム」が「真っ赤」になるとき—

三田 寛真

要旨

本稿では、色彩表現にみられるある種の多義性を記述し、認知言語学の道具立てによって合理的説明を与える。具体的には、色彩語が強調や比較を含むときの意味解釈を手がかりに、色彩表現の使用には、その色の明度・彩度を問題にするケース（「真っ赤なスープ」など）と、対象におけるその色の分布を問題にするケース（「真っ赤なスタジアム」など）とがあることを指摘する。そしてこの区別は、“ものに色があり、それが変わる”とはいかなる知覚的経験であるかを規定するイメージスキーマの二つの成分のうち、どちらに焦点が置かれるかの違いに対応することを示す。この説明は、色彩語そのものによらない間接的な色彩表現や、色彩表現を用いた比喩（色彩メタファー）の意味解釈の取り扱いにおいても有用である。従来、色彩語は、基本色彩語研究の成果を背景に、独立した語彙カテゴリーとしての内的構造が語られることが多かった。それに対して本稿の議論は、言語表現を介して色彩が物体や空間とどう結びつけられるか、という外部接続の観点から色彩表現の意味記述・分析を施したものと位置づけることができる。

キーワード：色彩表現（色彩語），視覚的变化，イメージスキーマ，認知言語学，色調と分布，色彩メタファー

1. はじめに

本稿では、色彩表現の意味解釈が二つのスケールによって構成されていることを指摘し、その成立基盤として、“ものに色があり、それが変わる”とはどういうことかの視覚的経験がモデル化されたイメージスキーマがあることを主張する。議論の核となる観察は、次の二つの文において、「真っ赤（だ）」という言い方で強調されている内容が異なるというものである。

- (1) ビーツを大量に入れたら、スープが真っ赤だ。
- (2) スタジアムはユニフォームを着たサポーターで真っ赤だ。

大まかにいえば、(1) では赤としての色調が問題となっているのに対して、(2) では赤い領域の広がり方が問題となっている。本稿のねらいは、色彩表現にこのような解釈の違いが生じるしくみを、認知言語学の道具立てを用いて説明し、それによって、語彙カテゴリー論において語られがちな色彩語の意味研究に異なる観点を提供することである。

本稿の構成は次の通りである。2 節では研究の背景として、言語研究における色彩語の主要な取り扱いとその課題を簡単に述べ (2.1 節)、そのうえで本稿が認知言語学のイメージスキーマの理論・手法に依拠するものであることを明示する (2.2 節)。つづく 3 節が本稿の中心的内容である。まず、色彩表現には、当該の色の色調を問題にする場合と分布を問題にする場合とが認められることを指摘し (3.1 節)、その違いをもたらす認知的基盤として、視覚的変化のイメージスキーマの存在を特定し、各例を整理する (3.2 節)。また、このイメージスキーマが色彩語以外を用いた色彩表現にも同様に関与していることを示す (3.3 節)。さらに 4 節では、本稿の説明が色彩表現の比喩的使用・解釈 (色彩メタファー) に対しても適用可能であることを述べる。5 節はまとめである。例文は、他の文献から引用したものを除き、すべて筆者による作例である。

2. 研究の背景

本稿の議論の骨子は、色彩表現の意味においてこれまで見落とされてきた一側面に焦点を当て、そこに認知言語学的な見地から説明を与えるというものである。そこで研究の背景として、まず、色彩語の意味に対する言語学の典型的な見方がどのような問題を抱えているかを述べておく。そのうえで、本稿が依拠する具体的理論・手法として、イメージスキーマを用いた認知言語学の意味分析を概説する。

2.1 色彩語の意味論

ことばと色彩とのかかわりは、文献学や人類学における関心に端を発して長らく議論されてきたテーマだが、とりわけ Berlin and Kay (1969) による基本色彩語 (あるいはその発達階層) 理論の提唱以来、研究の重点は、語群としての内的なシステムの解明に置かれてきた。すなわち、いわゆる色相・彩度・明度などによって規定される色彩空間を、ある言語文化の色彩語群がどのように指示範囲として分け合うか、そしてそれが通時的・共時的にどのように異なっているか、という問いが近年でも研究の大きな柱である。色彩語は、言語学の意味論においても、自然言語の概念や語彙のカテゴリー形成のしくみを知るためのモデルケースとしてよく言及されるが、それもあくまで体系内的なしくみに焦点を当ててのことである¹⁾。

しかしながら、我々がものの色彩を述べることによって視覚世界のある部分を描写するときには、色と名前の閉じた関係だけが展開されることはまずない。色彩と世界の他の要素 (主にはその色彩を持つ物体) とが相互に意味を規定されることで、はじめて特

定の視覚的内容が描きだされる。この点では、どのような具体的状況について色彩語が使われているか、言い換えれば、言語表現によって色彩は視覚世界にどのように置かれるかが問題になるのだが、これを取り扱った言語学的議論は乏しい。もっとも、Lyons (1995) や Lucy (1997) が、従来の研究における基本色彩語への偏重やカラーチャートによる手法に疑問を投げかける立場から、色彩語の、実際の使用における指示内容や統語的分布の記述に基づく意味分析の必要性をうったえたことは特筆すべきである。だが、依然として具体的研究はあまり進んでいないのが実情であり、本稿の議論はその穴を埋めることをねらいとして行うものである。

2.2 イメージスキーマによる意味分析

言語現象の成立や作動のしくみを、我々の経験的（身体的）基盤に照らして明らかにすることを試みる認知言語学にとって、意味記述・分析のうえで、とりわけ重要な道具立ての一つがいわゆるイメージスキーマである。イメージスキーマとは、世界との様々な相互作用のなかで知覚的経験を通して形成された、ものの形状・動き・関係などを規定する抽象レベルの（個々の対象の具体的なイメージとは異なる）心的表示であり、ことばの意味概念の根源となるものである。これまで、認知言語学内外の実証的・哲学的研究に基づき、起点—経路—着点、容器、中心—周辺、接触などをはじめ、いくつものタイプが想定されてきた（Oakley 2007）。

イメージスキーマの考え方は、ある種の多義性の成立機序や、類義的な二つの表現の違いに関して合理的説明を与えることを可能にした。具体的には、イメージスキーマの背景化や変換という操作を想定することで、異なる意味用法のあいだの関係を適切に捉えられるのである。例えば、山梨（1995）は容器のイメージスキーマの背景化という観点から「出す」の多義性を説明する。「出す」は、次のように本動詞である場合に限っても、少しずつ違う様々な状況に対して用いることができる。

- (3) 家具を庭に出す。
- (4) 報告書を出す。（提出する）
- (5) お金を出す。（支払う）
- (6) 喜びを顔に出す。（現わす）

（山梨 1995 : 102 の表中より抜粋）

典型的には (3) のように、ある有限の空間的領域（容器とみなされる物体や場所）の中にあるものを、その境界の外に移動することを表し、その領域を「部屋から」などと明示することができる。一方で (4)、(5)、(6) などの用例では、容器として明確に隔てられた空間的領域が必ずしも前提とされておらず、どこから出すのかを言語化できるとは

限らない。これらの用法の派生においては、本来「出す」が前提とする容器のイメージスキーマが、異なる度合いで背景化されているのである（山梨 1995 : 101-103）。

また Lakoff (1987) は、例えば、次の (7) と (8) における *spill out* の使用をイメージスキーマの変換の観点で捉えている²。

(7) The wine spilled out over the table.

(8) The fans spilled out over the field.

(Lakoff 1987: 441)

この二つの文ではそこに *spill out* しているものの在り方が異なり、(7) ではそれがワインという連続したものであるのに対して、(8) では何名ものファンという個体の集まりである。Lakoff によれば、前者は、物体の集まりを一かたまりとして見る *mass* のイメージスキーマを、後者は、成員一つ一つを区別して見る *multiplex* のイメージスキーマをそれぞれ反映したものである。これらのイメージスキーマは、個体が集まっているのをある程度離れたところから見ると一つのかたまりに見える、というような素朴な知覚的経験に基づいて変換可能な関係を成し、ゆえに *spill out* という表現はそのどちらについても使えるのだという (Lakoff 1987: 428, 441-442)。

本稿では、このようなイメージスキーマの理論・手法を具体的な道具立てとして、色彩表現の意味解釈の成立機序を体系的に捉える。

3. 色彩表現の意味解釈と視覚的变化のイメージスキーマ

本節では、本稿の核となる観察と議論を示す。具体的には、色彩語が比較や強調を伴う場合に着目することによって、色彩表現の意味解釈に潜在する二つのスケールを浮き彫りにし、その背景に、色の見え方に関する経験の抽象的パターンとしてのイメージスキーマをみいだす。

3.1 「真っ赤なスープ」と「真っ赤なスタジアム」

多くの属性語と同様に、色彩語も比較や強意の表現を作ることができる。まずここでは、そうした表現が、対象の色彩に関してどのような側面を比べたり強めたりできるかを、具体的な場面設定のもとで考えたい。はじめに、「X は Y よりも赤い」という比較表現について次のような発話場面を想定する。にんじんの品種には、オレンジ色に近い一般的なにんじんよりも鮮やかな赤色をした、金時にんじんと呼ばれるものがある。これについて、例えば両者を見比べながら (9) のような発話が可能である。

(9) 金時にんじんは、一般的なにんじんよりも赤い。

どちらの品種も「赤い」と形容できる範囲内にあるが、金時にんじんの色合いの方が、より典型的、焦点的な赤に近いということを意図して「よりも赤い」と表現することができる。ここで比較されているのは、赤としての色調である。

一方、「XはYよりも赤い」という表現は、これとは異なる側面が問題になっている場面でも使うことがある。例えば、紅葉したカエデと常緑のスギが混在している山を眺めている場面を想定する。その山は、標高の低いあたりでは植生の八割がカエデで二割がスギであり、標高の高いあたりではその割合が逆であるとする。そのような状況において、(10)を発話することができる。

(10) カエデが多い麓のあたりは、スギが多い山頂付近よりも赤い。

この「よりも赤い」は、山頂よりも麓の方が赤く見える部分（それぞれの領域における赤い部分の割合）が広いという意味合いで用いられている。(9)とは異なり、この状況では赤色の鮮やかさや濃さは問題となっていない。極端に言えば、仮に麓と山頂のすべてのカエデの葉が同じ赤さで紅葉していたとしても、(10)は違和感なく発話できるのである。なお、カエデの「赤」とスギの「緑」とを比べているわけでもない。そのことは、そもそも、赤と他の色とを見比べて前者のことを後者「よりも赤い」とは言わないという一般的事実から明らかである。このように(9)と(10)から、「XはYよりも赤い」という比較表現は、赤としての色調を問題にする場合にも、赤い部分の分布を問題にする場合にも使用できることが分かる。

同様の要領で、次に「とても黒い」という強意表現を考える。例えば、焚き火にくべた薪が不完全燃焼を起こし、黒煙が出ているような状況で(11)を述べたとする。

(11) 焚き火の煙がとても黒い。

この文で「とても」という副詞が強調しているのは、その黒色がいかに濃く、暗い色合いであるかであり、その点で(9)と同様に色調が問題にされている。純粋な白から純粋な黒までの明暗の連続があったとして、当該の煙は、後者にとても近いところの黒色をしているというわけである。

これに対して、「とても黒い」という言い回しを、よく熟れて果皮が黒い斑点だらけになったバナナに対して使ったとする。

(12) バナナがよく熟れてとても黒い。

(12)の場合、「とても」による強調は、果皮において斑点の黒色が甚だしく広がってい

ることに関して取り立てているのであり、その黒色の明暗の度合いを問うてはいない。ゆえに、斑点一つ一つの色がすべて同じであり、しかも熟れる過程で色合い自体は変わってもいけないという認識があったとしても、(12) は問題なく発話できるのである。これは当該の色の広がり述べている点で、(10) と同じである。

さらに、強調表現の別の一種として「真っ赤」という形式についてもみておく。色彩語の一部は、属性の純粹さや完全さを表す、接頭辞「真」を付加して複合語を形成することができる³、そこでも上でみたような二つの使用状況の区別ができる。例えば、赤みの強いビーツを加えて作ったスープについて (13) のように述べるとする。

(13) ビーツを大量に入れたら、スープが真っ赤だ。(= (1))

これは、液色が極めて濃い赤色にできあがったのに対して「真っ赤だ」と表現したものである。そこでは、赤色の純度が(スープにしては)甚だしく高いということが、接頭辞「真」によって強調されている⁴。

他方、「真っ赤」にはこれとは異なる使い方がある。赤いユニフォームのサッカーチームがあり、大勢のサポーターたちがそのユニフォームを着て、試合の応援をしているとする。その様子を (14) のように報告することができる。

(14) スタジアムはユニフォームを着たサポーターで真っ赤だ。(= (2))

ユニフォームはそもそも色が決まっているものであるから、(14) の「真っ赤」が赤の色調上の変異について述べていないことは明らかである。ここでは、サポーターがスタジアムの座席を埋め尽くすことによって、一面が赤色で占められたさまを「真っ赤だ」と言っているのである。(13) とは異なり、赤い領域の広がり方が強調されている。

以上のように、色彩表現が比較や強調を伴うとき、それらが、どのような色調かを決めるスケールに適用される場合 ((9)、(11)、(13)) と、その色が対象の領域にどのくらい広がっているかに関して適用される場合 ((10)、(12)、(14)) の二つのパターンがあることが分かる。次節に示すように、この意味解釈上の区別は、物体の色彩状態とその変化に関するスキーマ的知識の二成分に対応するかたちで、体系的に動機づけられていると考えることができる。

3.2 視覚的变化のイメージスキーマ

いま図1の四角形のように、一定の広さを持ち、一部分がある色合い(ここでは灰色)で彩られた領域があるとする。



図1 ある広さ、ある色を持つ領域

我々が、この領域の「色が変わった」あるいはこの領域と「色が違う」と認識・表現できるのは、大きく分けて二つの場合においてである。一つは、いわゆる明度や彩度などが変わって、別の色合いや他の種類の色になるときであり、例えば図2の状態Aから状態Dへと変化するような場合である。これを色調の変化と呼称しておく。

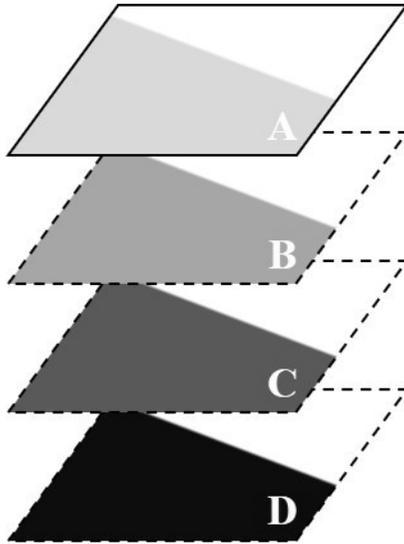


図2 色調の変化

もう一つは、その色をした領域の面積、すなわち無色の領域との割合が変わるときであり、例えば図3の状態1から状態3へと変化するような場合である。これを分布の変化と呼称しておく。

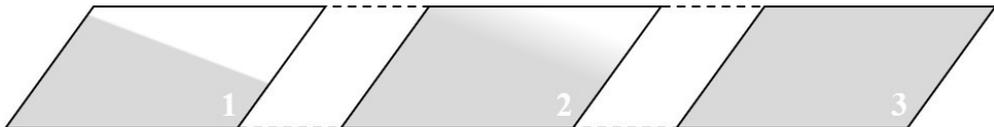


図3 分布の変化

ここでいう変化とは、時間経過による文字通りの変化（現在の状態に対する、5秒後の状態など）だけではなく、同一の時空間にある二者を比べた場合の差異（左側の箱の状態に対する、右側の箱の状態など）や、カテゴリー上の変異（ヒグマに対する、シロクマなど）も含む。いずれも「色が変わった」あるいは「色が違う」という認識や表現を適用することができる。それが、図2上の変化や差異に向けられる場合には、対象の視覚情報のうち色調を決めるスケールに焦点が当たっているのに対し、図3上の変化や差異に向けられる場合には、色の分布を決めるスケールに焦点が当たっていると考えることができる。

見方を変えると、そもそも図1には二種類の変化の方向が潜在しているといえよう。つまり、状態Aから状態D、状態1から状態3への変化が、実際に起きるか否かに関わらず、我々は、図1のすがたをした物体に対峙するとき、それがいまそのような色彩状態をとっているという現前の事実を捉えるためのスケールを、二つ持っているのである。この二つは背反するものではなく、図4のようにそれらを縦軸（A~D）と横軸（1~3）とした組み合わせ（A1~D3）を成しうるものであり、個々の具体的な知覚対象においては、例えばA1位置からC2位置、C2位置からD3位置など、様々な色彩状態の変化が観取されうる⁵。

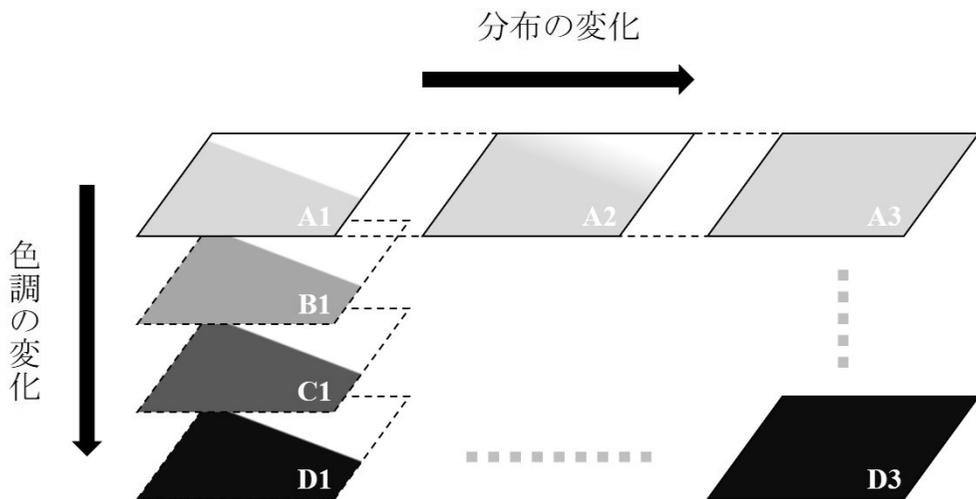


図4 視覚的变化のイメージスキーマとその成分

そしてこれが、視覚世界内で“ものに色があり、それが変わる”とはどういうことかがモデル化されたイメージスキーマとして、色彩表現の使用や解釈を動機づける。すなわち、色彩表現に認められる二種類の意味内容は、当該の物体の色彩状態が、図4でいう縦軸成分と横軸成分のいずれに沿って捉えられているか、言い換えれば、どちらに焦点

を当て、どちらを背景化するかの違いからくるのである。本質的には、その発話が比較や強意を含むかどうかにかかわらず、物体の色彩が話題になる時点で二つのスケールは潜在し、あくまで比較や強調が加わることで意味的に顕在化すると考えるのが妥当である⁶。

以上を踏まえ、改めて (9) ~ (14) の各例を下に示す図5に照らして整理する。例えば (9) では、一般的なにんじんの色が A1、金時にんじんの色が D1 にあるのを見比べて D1 が A1 「よりも赤い」と表現しているということになる。ここでは、分布のスケールは背景化されている。同様に、(11) の文が眼前の煙を「とても黒い」と描写するときには、それよりも黒くない A1~C1 を前提に、D1 のことを言っている。(13) でも、はじめは A1 くらいだったスープが D1 ほどに「真っ赤」になったのである。それに対して (10) の「よりも赤い」は、山頂のカエデの分布を A1 相当としたときに麓のそれが A3 相当であることが意図されており、横軸に沿って比較されている。ここで背景化されているのは色調のスケールの方である。(12) も、黒点のなかったバナナが A1、A2 と変色し A3 ほどに黒点の面積が増えたのを「とても黒い」と表現する。同じように (14) も、スタジアムの空席が、最終的に A3 のごとくすべて赤いユニフォームを着たサポーターで埋め尽くされたことをもって「真っ赤」とするのである。

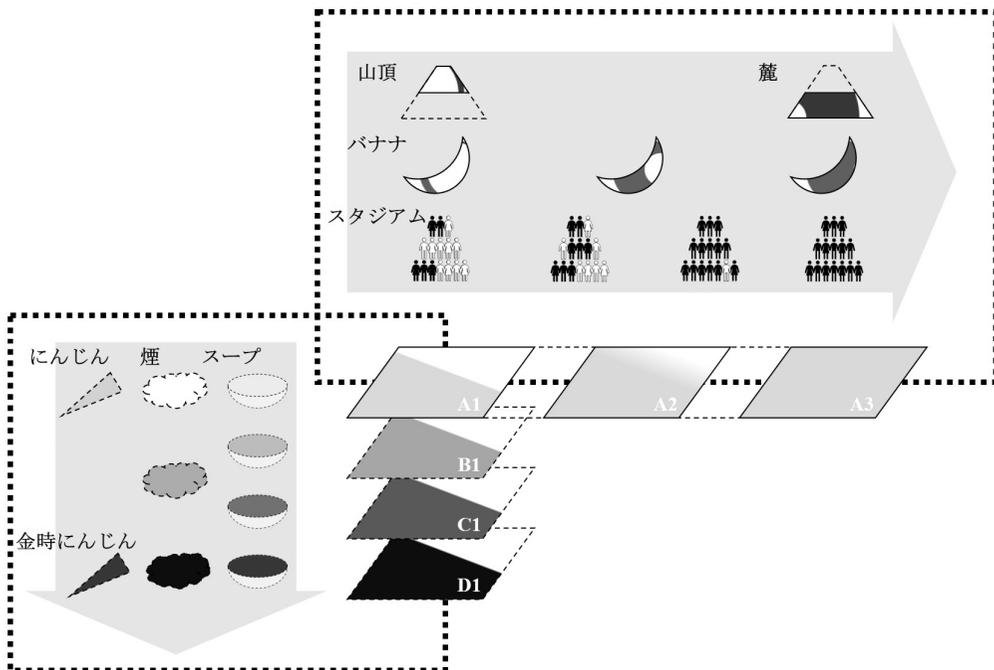


図5 視覚的変化のイメージスキーマと (9) ~ (14) の具体的対象における色彩

聞き手の側からすると、発話された色彩表現をどちらのスケールに沿って解釈すれば

よいかを決めることになるが、その際には前後文脈以上に、そこに現れる物体に関する世界知識が要となる。例えば、煙やスープのように、決まった形を持たない流体は“分布”を定義しにくく、また攪拌されて全体が同じ色になることが多いため、横軸が採用されることは必然的に稀だろう。反対に、ユニフォームというものは色が薄くなったり濃くなったりはしないこと、スタジアムは観客が座席を埋めていくものであることなどが分かっているならば、自ずと縦軸を問題にするという選択肢は殆どなさそうである⁷。

ただし、すでに述べたように縦軸と横軸は背反するものではなく、一つの対象について同時に両方の成分が含まれる場合もある。例えば、恥ずかしさで顔色が変わる状況を考える。頬の一部が赤らみはじめやがて顔の広い範囲が赤くなり、しかも薄めの赤から鮮やかな赤へと移っていく、というような見え方に対して (15)、(16) のように発話することができる。

(15) 恥ずかしさのあまり顔がとても赤くなる。

(16) 恥ずかしさのあまり顔が真っ赤になる。

これらにおいては色調のスケールと分布のスケールがどちらも背景化されておらず、図4でいえばA1からD3のように斜め方向へ移っていく状況に対して、「赤くなる」や「真っ赤になる」と言っているのである⁸。

3.3 色彩語以外による（広義の）色彩表現

これまでの例にはいずれも色彩語が用いられているが、物体の色合いを表すのに使われることはそれらに限られない。例えば「曇る」や「濁る」などの動詞表現は、本来的に色彩の変化を表すとまではいえず、直接には（雲が出たり、汚れるなどして）対象の透過度が落ちることを意味しているが、そうなる際には必然的に色合いが白みがかったり、くすんだ色となったりするため、結果として色合いの描写にもなる。本稿が同定した視覚的变化のイメージスキーマは、色彩状態の見えのモデルなのであるから、色彩語という語群だけに特異的に関与するのではなく、そのような広義の色彩表現全般に当てはまると考えるのが妥当である。例えば「曇る」の例として (17)、「濁る」の例として (18) を検討する。

(17) 部屋の窓ガラスが、温度差で徐々に曇っていった。

(18) フラスコAの溶液の方が、フラスコBの溶液よりも濁っている。

(17) は、はじめは向こう側が見える程度であったのが次第に完全に不透明になったというように窓ガラスの結露の濃さが強まったことに焦点を当てることもできれば、隅の方

だけが曇っていたのが次第に一面曇ってしまった、という具合で、結露した領域の広がり方に焦点を当てることもできる。前者が、視覚的变化のイメージスキーマの縦軸成分(色調の変化)の把握であり、後者が、横軸成分(分布の変化)の把握である。窓ガラスに生じる結露は、現実的には白みを増しつつ広がりもするのであるが、視認できる成分としては区別され、片方だけでも「曇っていった」と発話できるのである。(18)も同じ要領で考えることができる。一つには、フラスコAには藻が生えたような濁った緑色の液体、フラスコBにはエメラルドのような透明な緑色の液体が入っていた場合に、(18)のように言うことができる。もう一つは、例えばフラスコの底の方から液面の方まで順々に濁っていく化学反応があったとして、フラスコAが既に下から上まで全体が濁っているのに対してフラスコBが下半分しか反応が進んでいないような場合にも、(18)で表現できる。ここでも、第一の読みが視覚的变化のイメージスキーマの色調成分の把握であり、第二の読みが分布成分の把握である。

以上のように、色彩表現に認められる二つのパターンの意味内容は、物体の色彩状態とその変化に関するスキーマ的知識を織りなす、縦横の二成分に起因するものであると考えることによって、合理的説明が可能なのである。

4. 色彩メタファーの研究への示唆

最後に、視覚的变化のイメージスキーマの観点から色彩表現を捉えなおすことが、比喩的に用いられた色彩表現(色彩メタファー)に対しても新たな観察を可能にすることを確認したい。よく知られているように、色彩語を筆頭とする色彩表現は、しばしば比喩的に用いられ、心情、視覚以外の知覚、社会的属性、善悪などの幅広い意味内容を表す。とりわけ「黒い関係」、「考えがまだ青い」にみられるような基本色彩語の意味的転移については、日本語に限っても多くの心理学的、意味論的研究が出されている(千々岩 1980、森田 1994、谷口 2006: 83-91、坂本 2007など)。それらの研究では、なぜ他にもなくその色からその意味が生じるのかの解明が中心的な課題とされてきたのだが、本稿のこれまでの議論はそれらに新たな視点を加える。すなわち、視覚的变化のイメージスキーマは色彩表現が比喩的に用いられる際にも効いているか、という問いである。効いているのであれば、それを無視して色彩メタファーの分析は十分にできないだろう。実際のところ、色彩メタファーにおいても、色調のスケール(イメージスキーマの縦軸成分)に焦点が当たっている場合と分布のスケール(イメージスキーマの横軸成分)に焦点が当たっている場合とが認められる。

このことを、悪意・不正があるといった意味で用いられる「真っ黒」を例に確かめる。この色彩メタファーは、例えば(19)のように用いられる。

(19) この組織の執行部は、真っ黒だ。

この文は、異なる二つの状況に対して用いることができる。一つは、その執行部が行ったある不正が極めて凶悪であったというものである。ここでは、公正な状態（不正なし）から、軽微な不正、深刻な不正までの連続がグレースケール（白から黒）のグラデーションに対応づけられ、最も凶悪なレベルにあることが「真っ黒」によって表現されている。これはまさに、(13)において「真っ赤」がスープの赤みの強さを取り立てていたのと同様に、視覚的変化のイメージスキーマの縦軸成分に沿った色彩表現なのである。(19)のもう一つの解釈は、執行部のメンバーの（ほぼ）全員がそれぞれ大小の不正を働いていたというものである。これは、当該集団における不正者（黒）の割合を問題にしているのであり、度合いはともかく何らかの不正をしている者だけであることを「真っ黒」と述べている。これは(14)の「真っ赤」が、スタジアムが赤いユニフォームを着たファンで埋め尽くされていることを表現しているのと同様である。ここでは、横軸成分に沿った色彩表現が比喩として用いられているのである。

(19)は、どちらの軸が関与しているかにおいていわば多義的な例ということになるが、なかには一方の軸しか関与しないと考えられる色彩メタファーもある。(20)のように、何も思考できなくなった状態を「真っ白」と形容するのがその例である。

(20) 極度の緊張で頭が真っ白になった。

この色彩メタファーでは、思考停止の度合いを白みの強さに対応づけているのではない。例えば、薄い灰色が少しだけ思考できる状態であり、黒色が正常に思考できる状態である、といったことではない。むしろここでは、色がない状態を白色とみなしたうえで、心内という非具象的領域がいわば一面、白色になってしまったとすることによって、何の思考もない空の状態であることを表現しているのである。対象領域における色の広がり方をもっぱら問題にしており、これは、視覚的変化のイメージスキーマの横軸だけが関与している色彩メタファーと考えることができる。

色彩と色彩語との一対一関係を前提にした比喩研究では、例えば黒という色や「黒(い)」という色彩語と悪さの結びつけがどこからくるかを直に問うことになり、「真っ黒」として現れたときの微妙な意味解釈の分化については十分な観察、説明が難しい。本節では概観したにすぎないが、色彩の言語化の背景にある視覚的変化のイメージスキーマを考慮に入れることで、従来、記述されてきた色彩メタファーを精査しなおす可能性が生じるのである。

5. 結語

本稿では、色彩語を中心とした色彩表現が、ある場合には色調のみを問題にし、またある場合には色の分布のみを問題にすることを指摘し、その存立基盤として、物体上の

色の見えに関する知覚的経験がモデル化されたイメージスキーマの存在を認めた。従来の主流の色彩語研究が色彩という概念・語彙カテゴリーの内部にせまるものであるとすれば、本稿の議論は色彩概念の（世界との）外部接続のしくみを示したものであり、その点で両者は補完関係にある。

註

- 1 認知言語学でも、Lakoff (1987: 24-30) や Taylor (2003: 1-18) のように、色彩や色彩語を意味の一般問題にとって示唆的なものとして言及する論考は多いのだが、やはりカテゴリー論を基礎づける文脈が主である。どちらかといえば、色彩語研究から認知言語学の理論的着想を得るという方向であって、認知言語学のケーススタディとして色彩表現を分析するという方向ではない。その後者を、本稿で行おうとしている。
- 2 これらの例は山梨 (1995) でも引かれており、Lakoff の議論も踏まえて、認知のフォーカスが集合それ自体に置かれる統一的スキーマと、集合のメンバーにおかれる離散的スキーマという区別を行っている (山梨 1995 : 124-127)。
- 3 接頭辞「真」を付加できるのは「黒」、「白」、「赤」、「青」、「緑」、「黄 (色)」、「茶 (色)」、「紫」、「ピンク」など、いわゆる基本色名が主である。形成された複合語は、基本的には名詞 (「真っ黒の」) とナ形容詞 (「真っ黒な」) になるが、一部、イ形容詞 (「真っ黒い」、「*真っ赤い」) や量語的形式 (「真っ赤っか」、「*真っ青さお」) で使えるものもある。
- 4 この、接頭辞「真」+色彩語という表現を、カテゴリー論の見地から考察したものと山田 (2010) がある。山田論文は、混じりけのなさを表すはずの接頭辞「真」が、「チッソ肥料の効きすぎで、葉が真っ黒になっとうなあ。」(山田 2010 : 121) のように、決して純粋な色合いではなかろう対象についても使用されることがあるという言語事実に注目し、このとき発話者の色彩カテゴリーに生じているアドホックな変容をモデル化している。ただし、あくまでカテゴリー問題に主眼があるためか、山田論文では接頭辞「真」+色彩語が、もっぱら色調の純粋さ、完全さを述べるものとしてのみ議論されており、本稿の (14) が例示するように色の広がり方についても使われることは考慮されていない。例えば、「ワイシャツの襟は垢で真っ黒に汚れていた。」(山田 2010 : 121) という文について、絵の具のような黒色のはずがないのに接頭辞「真」がついているとしているが、この文はそもそも黒色の純度を問題にしているというよりもむしろ、(14) と同じ要領で黒い汚れの広がりを問題にしていると考えられる。
- 5 図 4 では便宜上、縦軸を四段階、横軸を三段階しか描いていないが、その数には全く意味はなく、実際には人間が違いを識別できる限りにおいて無数の層があいだに存在する。
- 6 本稿の議論は、イメージスキーマには成分 (内部構造) があること、そしてその部分的な焦点化や背景化が起こりうることを想定しており、これは一般的な分析と比べると奇異あるいは不適當にみえるかもしれない。しかし、イメージスキーマの理論に照らして、この想定には特に飛躍や改変はなく、また、実際の分析事例を見ても (内部構造が肝心だと明言こそしていない

ケースもあるが) そうした想定なしには成立しないものが多々ある。例えば山梨 (2009) は、Lakoff (1987) の観察と分析を引いて、*Sam walked over the hill.* と *Sam lives over the hill.* における *over* の用法の違いを、イメージスキーマの焦点シフトとして説明する。すなわち、前者では、起点—経路—着点のイメージスキーマの経路部分に焦点が当たっているのに対し、後者ではその着点部分に焦点が当たっているという (山梨 2009: 96-97)。そこでは、イメージスキーマに、内部構造とその部分的な焦点化が想定されている。本稿が提案する視覚的变化のイメージスキーマは、位置関係や形状が図式化された静的なタイプではなく、プロセスが図式化された動的なタイプに該当する (静動の区別については Cienki (1997: 6-7) を参照されたい。) が、同じように成分の焦点化を想定するのは妥当であると考えられる。もちろん、そもそもイメージスキーマの理論自体が仮説段階にあるため、そうした処置も暫定的方策の域を出ない。加えて、正確な心的実在や獲得機序を述べるためには、色彩一般の認知科学とも接続のうえで別途の検証が必要であると考ええる。

- 7 白い点と赤い点を細かく、混在させて打っていくと全体としてピンク色に見える、というように一定の条件下では分布の変化が色調の変化として経験される。ゆえに、スタジアムのようなものでも、物体の置かれ方などによっては色調のスケールの方が問題になることがあるだろう。
- 8 本稿の分析に対して、そもそもイメージスキーマとしては“色の変化”が一つあるだけで、色調の変化と分布の変化の二成分を区別する必要はないのではないか、というような疑問が生じるかもしれない。しかしながら、明度や彩度という非空間的屬性によって成立する色調の認知と、輪郭や面積といった空間的屬性の把握に依拠する分布の認知とは、知覚的经验としてあまりに質が異なり、それらが弁別されずにスキーマ化されていると考えるのは不自然に思われる。もしくは、そうした思弁的な根拠を抜きにしても、例えば、色彩語や「色」と共起する「濃い」、「鮮やかな」、「淡い」などの形容語が、色調のスケールに沿ってしか使用されない (図 4 中の A1 から A3 への変化を「濃くなった」とは言わない。) という言語事実が、色調と分布を別成分としておくべきことの傍証といえるだろう。

参考文献

- Berlin, B. and P. Kay. 1969. *Basic Color Terms: Their Universality and Evolution*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- 千々岩英彰. 1980. 「色彩の内包的意味に関する心理学的研究」、『武蔵野美術大学研究紀要』、13、pp.62-80.
- Cienki, A. J. 1997. “Some properties and groupings of image schemas.” In Verspoor, M. H., K. D. Lee and E. Sweetser (eds.) *Lexical and Syntactical Constructions and the Construction of Meaning*, pp.3-15. Amsterdam: John Benjamins.
- Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lucy, J. A. 1997. “The Linguistics of ‘Color’.” In Hardin, C. and L. Maffi (eds.) *Color Categories in Thought and Language*, pp.320-346. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lyons, J. 1995. “Colour in Language.” In Lamb, T. and J. Bourriau (eds.) *Colour: Art & Science*, pp.194-224. Cambridge: Cambridge University Press.
- 森田克己. 1994. 「色彩とイメージの共感覚現象に関する研究」、『札幌大谷短期大学紀要』、26、pp.93-119.
- Oakley, T. 2007. “Image Schemas.” In Geeraerts, D. and H. Cuyckens (eds.) *The Oxford Handbook of Cognitive Linguistics*, pp.214-235. New York: Oxford University Press.
- 坂本真樹. 2007. 「色彩語メタファーへの認知言語学的関心に基づくアプローチの検討」、楠見孝(編)『メタファー研究の最前線』、pp.307-326、東京：ひつじ書房.
- 谷口一美. 2006. 『学びのエクササイズ 認知言語学』東京：ひつじ書房.
- Taylor, J. R. 2003. *Linguistic Categorization*. 3rd ed. Oxford: Oxford University Press.
- 山田仁子. 2010. 「カテゴリーを形成する2種のベクトル—「真(ま)＋色彩語彙」表現の分析—」、『言語文化研究』、18、pp.115-130.
- 山梨正明. 1995. 『認知文法論』東京：ひつじ書房.
- 山梨正明. 2009. 『認知構文論—文法のゲシュタルト性—』東京：大修館書店.

謝辞

本研究はJSPS 科研費 JP19J22002 の助成を受けています。研究の遂行にあたって、発表や議論のための貴重な場を設けていただいた藤井聖子教授に、お礼申し上げます。また原稿の執筆に際しては、藤井教授、東北学院大学の阪口慧氏、本誌の匿名査読者の皆様より、数々の重要なご助言、ご指摘をいただきました。ここに感謝の意を表します。当然ながら、本稿の内容に関する一切の責任は筆者にあります。